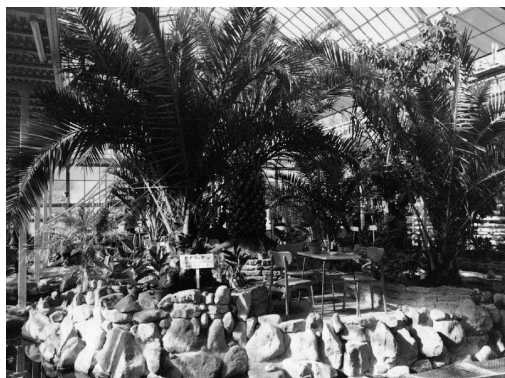


ここで、温泉育ちのわたしたちが忘れてはならないのは、自立心旺盛な温泉のパイオニアたちは、自ら率先して交通網の整備を行うなど、努力を惜しまなかったことです。明治14年（1881年）滝本金蔵は私費を投じて道路を開削しましたし、旅館や小売店の人々が日曜日ごとに道路をならし、毎月15日は村をあげて道路改良に努め、馬車が通るようにした。その結果として、明治25年（1892年）に鉄道が開通をしたと言われています。本当に独立自尊のたくましい先祖の方々がいて、今日の繁栄があるのではないのでしょうか。特に、昭和12年を境に『南の別府、北の登別』というキャッチフレーズを意識して、グランドホテルという洋風ホテルが誕生したり、東洋一と呼ばれた第一滝本館の大浴場が作られたりと、大きな設備投資がなされました。温泉の方々も、時代を先取りする一大観光地へという意欲を持っていたと思いますが、しかし、この意思が花開くのは、不幸な戦争の時代を過ごし、第2次世界大戦以降を待たねばなりません。戦争が終わって進駐軍特需が起こり、それから、ようやく本格的に世を挙げての観光レジャーブーム（昭和25年ごろ）が起こり、登別温泉は成長路線を突っ走るようになります。

昭和30年ごろには50万人くらいであった観光客も10年後の昭和40年には

は171万人と3倍以上に増え、まち並みも古風な伝統を守る和風の旅館から、近代的な洋風旅館が立ち並ぶようになりました。また、熱帯植物園やクマ牧場、温泉科学館など、現在のアミューズメントパークにつながるさまざまな施設もこのころ建ちました。



▲昭和40年オープンの『大湯沼熱帯植物』

しかし、豊かになってさまざまな楽しみ方を覚え、目の肥えてきた観光客にどうやって何度も登別温泉に訪れてもらうのかという永遠の課題が残りました。自然の財産に恵まれ、来賓客の心配がなかった登別ではありませんが、日本全体の魅力ある観光地との厳しい競争が始まりました。

全市観光へ向けて 鬼の大群舞



そこで、観光協会を中心に、観光客も参加して楽しめるイベントとし

て、昭和39年から『地獄まつり』が始められましたね。

そうですね。そのため、みんなぞ知恵を出し、『地獄まつり』というイベントを育てていきました。道路を埋め尽くした鬼踊りの大群舞や鬼みこしを中心とした大パレードは、観光客の度肝を抜くダイナミックなアイデアとして、好評を博しました。踊りに参加したのは、町内会や婦人会、自衛隊、市内企業、文化団体、市職員などでまさしく全市観光の具休化です。

その後、平成5年に『からくり閻魔大王像』が設置されました。昨年からは『鬼花火』も始まりました。



▲今年約38,000人が見学に訪れた鬼花火

今年は、温泉の中心に『泉源公園』もオープンし、間欠泉の吹き出しを眺める多くの観光客でにぎわっています。登別の基幹産業は『観光』であり、観光協会が今も目的としている『全市観光』の精神は、観光ボランティアガイド会の皆さんによって

も実践されておりますし、着実に根をを広げていると思えますね。

新たな物語をつづる 登別温泉へ



150年前の開拓のころからのパイオニアの方々の精神が脈打っているかぎり、登別温泉は進歩を続けると言うこともできませんね。勇猛な鬼たちの闊歩する『鬼火の路』が指し示す湯の先には、地獄から極楽へ向かう癒しのお風呂、妻を思い、皮膚病を治した夫婦のぎずな物語があるということでしょうか。

登別温泉は時代のニーズを先取りし、修学旅行生をいち早く誘致したり、台湾、韓国に早くから目を付け、海外プロモーションを実施して東アジアからの観光客を増やし、全国1、2位の地位をずっと保ってきました。その精神は、皮膚病に悩む愛妻を温泉まで連れて行った一途な夫婦愛から始まったものです。そして、現在の登別温泉は、地獄の鬼が花火の華やかな明かりで人々を導き、心から癒しを覚える本物のお湯があるので。訪れた人が、家族や愛する人とのぎずなを確かめ合い、心を癒すところ、そんな愛のまちなんでですね。

楽しい物語りを語り、やさしい気持ちになるために、ぜひ、何度も登別温泉にいらしてください。

本日は貴重なお話ありがとうございました。